

東海道を汽車にして  
呉に下るや過ぎて行く  
驛々の道々に  
勝利をば祝ふ日の御旗  
武男は獨堪へやらぬ  
深き憂ひにうたれつゝ

廿六

京は自然の美はしき  
花よ、青葉よ、紅葉よ  
浪子は父に伴れられて  
五月半の青葉頃  
こゝに來れば、爽々と  
身の病をも忘れつゝ  
東に行けば蒲團着て  
寝たる姿の東山



花は無けれど行春の  
名残尋ねてひらくと  
胡蝶の舞ふも懐かしく  
又來て遊ぶ清水や

朱美しき欄干に  
鳩も馴れてや下りつゝ  
人様々の願事に  
いとも賑はふ境内  
裏に廻りて白瀧を

見るに心も清々し

祇園、西山、金閣寺

京の名所も飽きぬれば

宇治に下るや茶摘女の

節面白き鄙歌を

聞くに浪子は微笑みつ

山科さして行く道の

彼方を見れば夏霞



大和の天を隠しつゝ、  
近く流るゝ宇治川に  
ゆきかふ真帆の影清く  
薄紫に焦がれたる  
雲こそ浮べ大空に

浪子は雲時佇みぬ  
遠く聞こゆる鶏の  
聲も静けき村の午  
妹脊と見ゆる鄙人の

語らふ振も睦まじく  
家に歸るか、打伴れて

影は茂みに隠れしが

女や歌ふ鄙歌の

聲もあはれに聞こえけり

一郎は正宗、妾あ錆刀

妾あ切れぬ」  
郎は切れても



悲しき歌の節々の  
胸に響くか、坐るにも  
聞くに涙のさしぐみて  
浪子は吾と俯向きぬ  
麥の穂わたる涼風の  
身に泌むとしも覚えつゝ

廿七

花の名所舊き蹟  
浪子は父に伴れられて  
遊び廻るや次々に  
人は羨む旅乍ら  
癒えぬ病を抱く身の  
胸も氷に閉ぢられて

父が老いにし後姿を  
それと見るにも泣かれつゝ



杖とも成らむ自らの  
慰めまつる反對に  
いとゞ御心惱まして  
慰め受くる哀しさを

忍びて泣くや空蟬の  
頓て消ふ可き我身には  
綾や錦も何かせむ  
見るにも心進まねど  
父が情を思ひては

故ら撰ぶ華やかなの

美し衣身に着けて  
再び春に逢はむとは  
心の中に思はねど  
我亡き跡は妹に  
紀念となれと種々の  
唐織物も求めつゝ  
車に乗りて行く道の



清き景色も眼に入らで  
死に行く身にも懐しき  
いともしき我夫は  
何處の空にあるらむと  
思ふに胸も騒がれぬ

あゝ斯くてしも徒らに  
泣きて悶えて苦みて  
朽ち行く我か如何にして  
斯かる憂身と生れけむ

せめて一度我夫に  
逢見む事の叶ひなば

願は足らむ消えて行く  
身にも憾は残らじを  
憾は消えて現し身の  
早く消ゆるが悲しさよ  
深き思に沈む身を  
乗せて汽車は動きつゝ



と見る彼方の瀛車の窓  
武男が立てる姿見て  
思はず君が御名よびて  
狂へる如く手に持てる  
絹打ち振ればひらくと  
風に翻るや、朱鷺色の

廿八

日は早山にかくるひて  
遠きみ寺に鳴る鐘の  
音も淋しき夕まぐれ  
浪子が病はいとどしく  
重さ加へて人々の  
袂に露の置きそひつ

重き惱の間にも  
父の姿を見る時は



強ひてもつくる微笑に  
胸の痛を隠せども  
烈しき熱に浮かされて  
武男を呼ぶがいぢらしく

醫師は力を盡せども  
紫深き胸の血を  
吐く度々の重なれば  
二年近き疾病に  
瘡せ果てし身のいと瘡せて

蒼き面を照す火の

仄かに暗き病室に  
看護れる乳母の老の眼は  
いと曇りぬあはれさに  
浪子は細き目をあけて  
伯母や何處と尋ねしが  
又力無く目を閉ぢぬ

枕邊近く身を寄せて



病み臥す人の後れ毛の  
額にかゝるを搔上ぐる  
伯母を仰ぎて泣々に  
「これを武男の君へ」とて  
文渡す手もおのゝくや

優しき伯母が慰籍の  
嬉しがるらむ瘠せし頬に  
微けき笑を浮べしが  
忽ち消えて紅の

さと其面上りぬど  
見るく胸の血を吐きて

胸波立ちぬ身悶えぬ  
うつらくの夢心地  
「父よ」と呼びて微にも  
目を開きつゝ握る手の  
力弱さもあはれぞと  
父の心は亂れしが



母も来寄りぬ妹も  
千鶴子も側に寄添ひて  
名残惜むや、諸共に  
死なむと姥は咽びつゝ  
夜は静にも更け行きて  
ものうち語る人も無く  
庭に鳴くなる蟲の音の  
あはれよわると聞く程に  
浪子が息は絶え果てぬ

さし入る月に照らされて  
活けるが如き花の面に  
幽けき笑の残りつゝ  
あゝ美しき花はしも  
閉ぢぬ、萎みぬ、散果ぬ  
戀も煩悶も墳墓の  
奥底深く埋まれて  
何を名残の花か抑も  
墓の邊に匂ふかな



思ふは南臺灣に  
 かくとも知らて憂日をば  
 送り迎ふるいたはしの  
 武男の上や如何ならん  
 戀の紀念と贈りたる  
 指環は共に埋まれぬ

富よ、榮華よ、斯かる名は  
 たゞ現世のものなりき  
 葉末に置ける露の身の  
 消えては儚なき人の跡  
 青山あたり来て見れば  
 草木も哀し秋の風  
 櫻紅の音も無く  
 散りて重なる墓の邊に

廿九



香の煙の迷ひつゝ  
彼方の森に鳴く鳥の  
聲もさびしき墓所  
都の中もこゝのみは  
流石に秋の心地して

浪子の墓と記されし  
奥都城の邊に佇める  
武男は獨うち泣きぬ  
あゝ痛はしの我妻は

浪子は遂にみまかりて  
再び逢はむ術も無し

紀念の文を手にとれば  
薄墨の文字儂無くも  
いたく震へる筆の跡  
「此身は土と朽つるとも  
魂は御身に添はなむ」と  
讀むに心も亂れつゝ



甲斐無くも追ふ夢の跡  
祝の夕よ、兩人して  
伊香保に春の花旅よ  
共にならびて岩の上  
千代變らじと誓ひけん  
昨思へば胸裂けて  
妻よと呼べど答へせぬ  
石の面の冷やかに  
心づくしの白菊を

手向けて立てば又も散る  
櫻の枯葉ひらくと  
舞うて落つるや墓の上に

折しも靴の響して  
此處に來かゝる人の影  
武男は誰ぞと驚きつ  
彼方を見れば思ひさや  
浪子が父の中將の  
涙浮めて佇めり



二人互に手をとりにて  
語るつらさや悲みや  
涙は落ちて地に泌みぬ  
苔の下なる麗人の  
夢や思や如何ならむ  
あはれを添ふる雁の聲

新家庭不如歸の歌終

跋

近年に於ける文壇の一特徴として見るべきは文藝と家庭との近接にあり。これ一般士女の希望せるところ、余の如きは屢ば之を言説して措かざりし也。唯新體詩の方面に於ては、其作概ね淫靡拙陋の分子多くして、純潔清雅の趣味を鼓吹し、一般家庭の間に、花晨月夕朗誦の興に資すべきものなきを遺憾とす。這回友人溝口白羊氏が當代小説壇の一雄篇たる『不如歸』を翻して、之を流麗平易の詩と爲し、以て如上家庭文藝の缺陷を補充せんとするの舉に出でしと



は、余が多大の歡喜とする所なり。

白羊子が『文庫』詞壇に雄視するや久し。其清新の風趣を發輝して、平凡なる群詩人を壓倒せんとするの概あるとは眼識あるもの能く之を知了せんのみ。且つ余が殊に敬愛する所は其人格の眞摯にして、詩歌の研討に不動不盡の熱意を有するとなりとす。此篇に至ては、其目的とする所、旨と家庭文藝の上に存するが故に、多少其間に於て詞句の用法、才情の奔逸を制せざるべからざる約束ありて存す。而かも其詞句の流暢にして平易清洒の趣致ほの見ゆるは、以て白羊子の自ら一家の新調を形成するの材たるを看取す

るを得べし。

思ふに本書の刊行せらるゝや、都鄙の士女争うて之を朗誦し、家庭の上に少からぬ清雅の趣味を注入し得ると信ず。白羊子又以て得意とするに足らざる迄も、幾分其胸裡に歡喜の情なきを得ざるべし。

余は白羊子が詞壇に一步を轉じて、花々しき武者振を示したるを慶すると共に、又斯くの如き快舉が、他の俊逸なる新詩人によりて續行せられんとを希望するものなり。具眼の士單に之を以て蛇足の事とすると否とは、余暫く之を問はずして止まん。



早稻田草堂に於て  
著者の友人 高須梅溪

明治廿八年三月三日印刷  
明治廿八年七月九日發行

不許複製

定價參拾五錢

著者	溝口白羊
發行者	東京市神田區表神保町二番地 福岡新三
發行者	東京市淺草區下平右衛門町九番地 岡村庄兵衛
印刷者	東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所	東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社 秀英舍



發行所

東京市淺草區下平右衛門町九番地

岡村書店

東京市神田區表神保町二番地

福岡書店

特約販賣

順次不同

東京 東京堂

上田屋

東海堂

前川文榮閣

林平

大川屋

修學堂

大阪 中川勘助

杉本書店

名倉照文館

山中勘次郎

河合文港堂

名倉照文館

川瀨代助

名古屋 星野文星堂

熊本市 長崎次郎

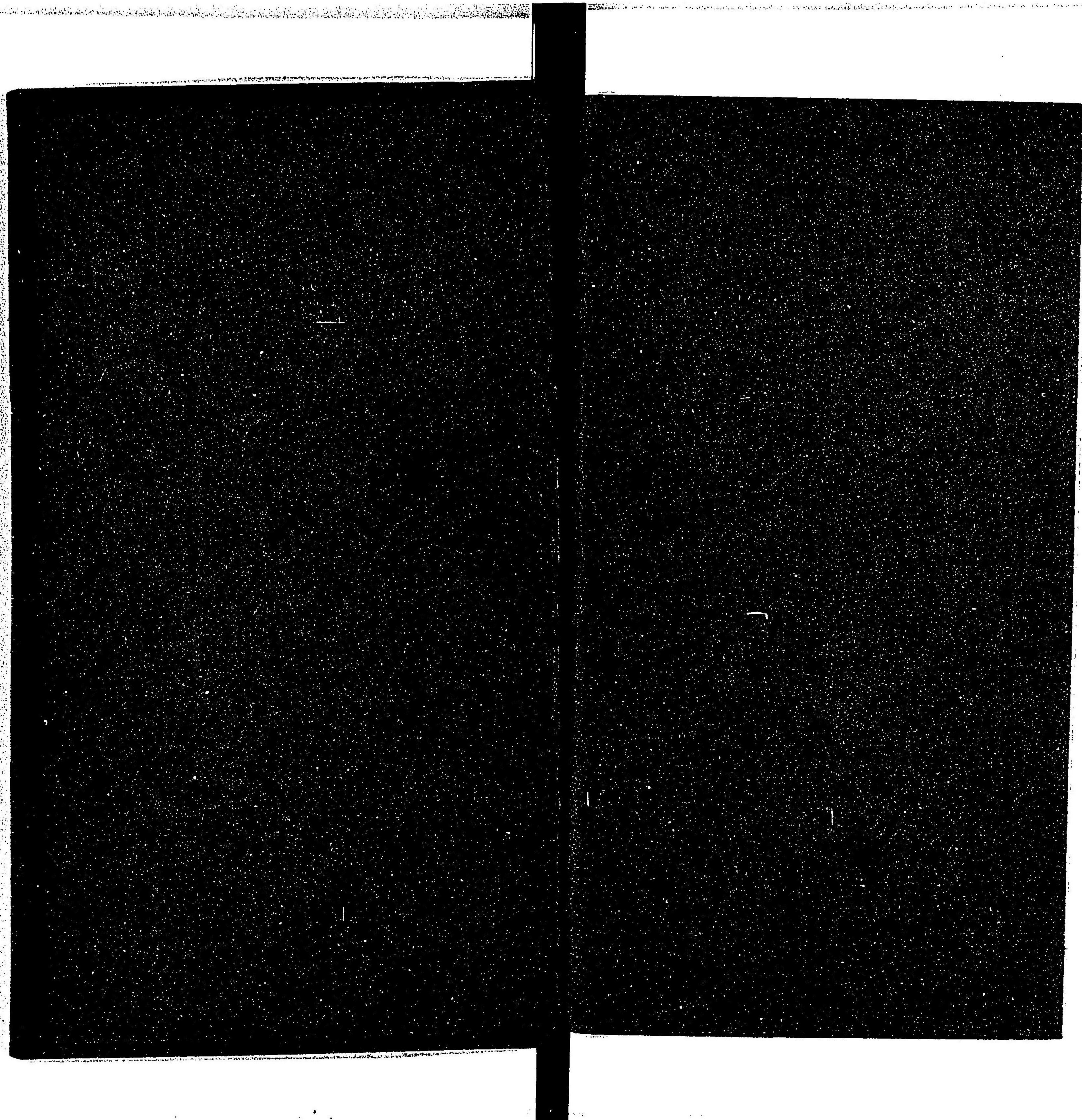
鹿兒島 吉田幸兵衛

久留米 菊竹書店

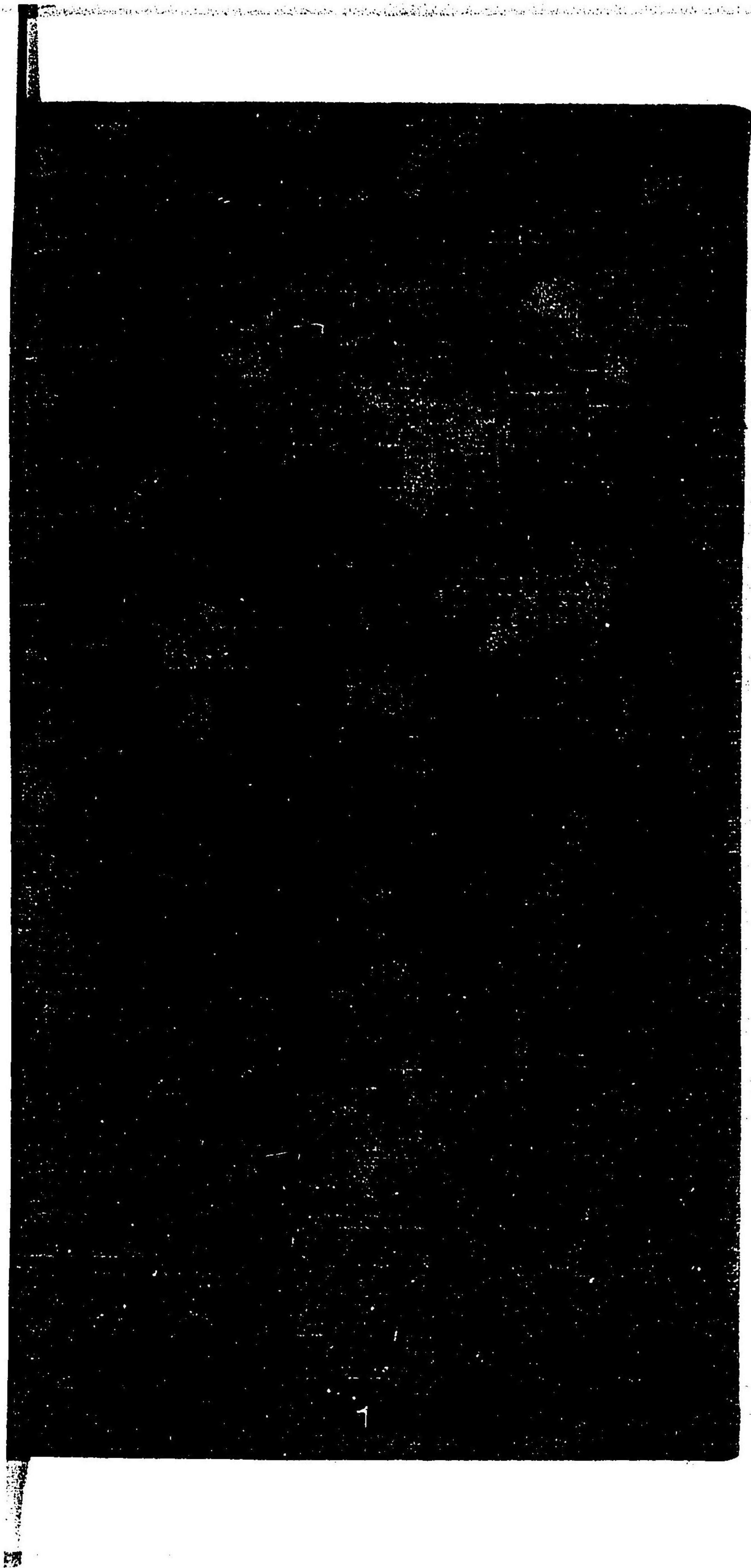
米市 小島大盛堂

函館











088106-000-8

特66-546

不如帰の歌

溝口 白羊/著

M38

DBG-0203

